

知的障害のある生徒のICT活用における セルフマネジメント力の向上を目指した授業づくり

Teaching methods of applying ICT to develop self-control ability on students with intellectual disability

北岡大輔
Daisuke KITAOKA

(和歌山大学教育学部附属特別支援学校)

保科由美子
Yumiko HOSHINA

(和歌山大学教育学部附属特別支援学校)

江田裕介
Yusuke EDA

(和歌山大学教育学部)

2012年10月11日受理

Abstract

In recent years, ICT, such as mobile phones, has infiltrated in high school students with intellectual disability (ID) at special schools. This study is a verification of effective lesson for ID students who learn to utilize ICT with consideration for the communication partner and surroundings. It was observed that students' consciousness to use ICT had been improved through the lead as the following;

- ① Illustrating specific scenes by using a skit
- ② Highlighting incidents/issues which students may encounter/experience
- ③ Encouragement for animated discussion among students

キーワード：著作権、メール、ウェブサービス、ケータイのカメラ機能、ICT活用のセルフマネジメント

I はじめに

文部科学省が平成21年に行った「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」では、高等学校2年生の95.9%が携帯電話を所有している実態が明らかになった(文部科学省, 2009)。また、平成23年に全国の特別支援学校を対象とした江田の「児童生徒の携帯電話所有率についての実態調査」では、知的障害がある高等部生徒においても、36.5%が携帯電話を所有しているという結果が報告され(江田, 2012)、特別支援学校の生徒にとっても、携帯電話をはじめとするICTが身近なものとなっている現状が示された。

ICTを活用していくことは、生活の利便性を向上させる。さらに、特別支援教育においては、アシスティブテクノロジーとしてICTをコミュニケーションの代替手段などに応用していくことも期待されている。しかしながら、特別支援教育の対象となる生徒は、他者の意図を予測することや、自他のプライバシーを意識することなどが不得手である場合が多い。そのため、ICTを利用する上でトラブルを抱えてしまうことも少なくない。

「教育の情報化に関する手引き」の第5章「学校における情報モラル教育と家庭・地域との連携」では、「社会の情報化が進展する中で、情報化の「影」の部分を十分理解した上で、情報社会に積極的に参画する態度を育てることは、今後ますます重要になる」とし

ている(文部科学省, 2010)。また、第9章「特別支援学校における教育の情報化」では「知的障害があるために、文面の意味を読み間違えて被害者になったり、逆に犯罪に巻き込まれて気付かないうちに加害者になったりするなどの場合がある。また、発達障害のある児童生徒の中には、言葉の理解に課題があったり誤った推論をしたりするなどの障害の特性が背景にあることで、社会規範に基づく判断に困難がある者がいる場合もある」とし、特別支援教育における情報モラル教育の必要性が述べられている。

本校高等部の生徒も、日頃からインターネットを使って調べ物をしたり、メールやSNSなどを使って友達とやりとりを楽しんだりしている生徒も多い。また、携帯電話のカメラ機能を用いて、興味があるものを撮影したり、メモ代わりに使ったりしている様子もうかがえ、ICTを身近なものとして活用している。その反面、インターネット上に個人が特定されるような情報をアップロードするなど、危険性に気付かないまま使っていたり、周囲の状況を考えないままカメラで撮影したりするなど自分勝手な使い方をしてしまうこともあり、トラブルが少なからず起こっている。

このようなトラブルを回避するためには、ICTを扱う際にどのような危険性があるのかを知ること、その上で、自分自身が主体であり、自分ならどのように扱うのかを考えていくことが不可欠である。しかし、ICT

に関する学習には抽象的で複雑な知識を求められることが多く、知的障害がある生徒にとっては理解が困難な内容が多い。

そこで、知的障害がある高等部の生徒自身がICTを扱う際に、周囲やインターネットの先にいる人たちのことを意識しながら安全に活用できる力を身につけられるような授業の在り方を探ることとした。授業においては、①寸劇などを用いて場面を具体的に示すこと②生徒自身が身近に経験しうる問題を取り上げること③生徒同士で協議できるようにすることを指導の軸として取り組むこととした。

Ⅱ 授業実践

本校高等部においては、小・中・高等部の一貫教育を行う普通科と、高等部から入学して3年間の教育で就労を目指す普通科総合産業コースを設置し、生徒の実態に応じて、充実した教育活動を行うようにしている。

今回は普通科、普通科総合産業コースのそれぞれで1単元の授業を設け、合計2種類の授業実践を行うこととした。

1. 授業実践①「どう使う? ケータイのカメラ機能」

①対象生徒の実態

普通科では、教科「情報」を週に1時間設けており、生徒の実態に応じて3つの能力別グループを編成し指導に当たっている。本単元の対象は、中・軽度の知的障害がある生徒6名からなる第1グループである(以下、第1グループとする)。

第1グループの生徒は6名中5名が携帯電話を所有している。残りの1名についても以前は利用していたが、使いすぎなどのトラブルから現在は使用を止められている。

技能的には6名全員が携帯電話のカメラ機能を使うことができる。事前に実施した「携帯電話の利用状況についてのアンケート」では、6名中4名が携帯電話のカメラ機能を日頃から利用していると回答しており、休みの日に電車を撮りに出かけたり、好きなアイドルがテレビに出演している様子を動画に撮ったりして使っている様子がよくうかがえる。しかし、撮影する時には周りにいる人の目を気にしないなど、状況を考えず自分の興味だけで使っていることも少なくない。そのため、本人が意図しないうちに、周囲の人たちを撮影してしまっていることもある。

②授業の計画と展開

第1グループの生徒たちにとって、携帯電話のカメラ機能は自分たちの趣味を充実させていくための一つのツールとなっている。そのためカメラ機能を使うことに対して良し悪しの両極で一意的な捉え方をさせると、「好きなことを禁止された」というような誤解を生

じかねない。そこで指導に当たっては、単純にカメラ機能を使うことが良いか悪いかではなく、周りの人の立場でどのように感じるか、他者の受けとめ方の予測と理解に指導の重点をおいた。具体的には、撮る側と、撮られる(写ってしまう)側の両方の立場で考えられるように、特定の場面をそれぞれの視点から撮影した2枚の写真を教材として用いた。この指導を通して、携帯電話のカメラ機能に対して適切な使い方を考えられるようにしていきたい。授業のねらいを表1に、授業の展開を表2に示す。

表1 「どう使う? ケータイのカメラ機能」のねらい

- ・携帯電話のカメラ機能で写真や動画を撮る行為を、周りの人がどう思うかを知る。
- ・携帯電話のカメラ機能を「こんな風に使っていい」と考えることができる。

③授業を通して

自分たちが普段どのようにカメラ機能を使っているのかを振り返ることができるように授業を進めたことで、生徒たちは「自分だったらどうしよう」と考えながら取り組んでいた。普段、相手の立場で物事を考えることが難しい生徒も、立場を対比させた2枚の写真を用いたことで、カメラに写ってしまう人がどのように感じるのかを具体的に考えることができていた。また単純に使わない方がよいと結論付けるのではなく、「人の乗っていないバスを撮りたい」など、周りの人に配慮しながらも積極的に使いたいという意見を出す生徒もいた。このように今回の授業では、生徒一人一人がじっくりと問題に向き合い、互いに意見を出し合うことができていた。

授業が終わってからも、生徒たちは今まで自分が撮った写真や動画を見返して、「よかった、あまり人が写っていない」、「この写真は大丈夫かな」と確認している様子が見られた。

2. 授業実践②「ネットの達人を目指して」

①対象生徒の実態

本単元の対象は、軽度の知的障害がある普通科総合産業コース(以下、Sコースとする)1年生から3年生までの生徒15名である。

Sコースの生徒に対して事前に行った「携帯電話及びパソコンの利用状況についてのアンケート」では、15名全員が「携帯電話を持っている」、うち14名が「日頃からメールを利用している」と回答した。メールの回数に関する質問項目では、10通以上と回答した生徒が5名見られた。また、12名がパソコンか携帯電話により日常的にインターネットを利用していると回答している。

普段の様子を見ると、Sコースの生徒は目的地の情

表2 「どう使う? ケータイのカメラ機能」の展開

| 学習活動 | 指導の手立て・生徒の反応 |
|---|---|
| 1. 互いにケータイで撮ったものを見せ合い、友だちがどのように使っているのかを知る。 | <p>撮ったものをまだちに紹介</p> <p>ケータイのカメラで。みんなはどんなものを撮っていますか?</p> <p>電車の動画を撮った。ゲームの画面を撮った。</p> |
| 2. ケータイのカメラをどのような時に使っているか、どのような時に使いたいかを考える。 | <p>どんな時にカメラを使いますか? 付箋に書き出してみましょう。</p> <p>「面白さ」という一面だけにとらわれ、これらの動画やそこに書き込まれたコメントを見て、素直に楽しんでしまう生徒もいる。</p> |
| 3. ケータイのカメラを使う理由について考え、発表する。 | <p>思い出のためとか、人に見せるためかな。後で見て楽しむためもあるかな。</p> |
| 4. カメラを撮る側と撮られる(写ってしまう)側の意識の違いを知る。 | <p>この男の人は何をしているのでしょうか?</p> <p>バスを撮っているのかな? 行き先(方向)を撮っているのかもしれない。ぼくも同じでバスが好きなのかな。</p> <p>では、バスの中に乗っている人からは、どのように見えるでしょうか?</p> <p>・私、撮られている。・びびります。・見られているような気がする。・嫌だな。・寂しい。・迷惑です。・怪しい人かもおれません。</p> <p>バスの中にいる人の気持ちを考え、テレビ画面に貼り出していく。</p> |
| 5. ケータイのカメラ機能をどのように使っていけばよいかを考える。 | <p>ケータイのカメラはどのように使っていけばよいのでしょうか?</p> <p>みんながいる所ではあまり撮らない方がいいのかな。</p> <p>でも、記念に残したいっていうのもある。</p> <p>撮ってもいいかどうか、撮るとか。</p> <p>周りに人がいないかどうか確認する。</p> <p>人が乗っていないバスを撮りたいなあ、と思う。</p> |

報やバスの時刻を調べることなどにインターネットを利用している。インターネット上の音楽や動画、小説などをダウンロードし、趣味の一つとして楽しんでいる生徒も多い。中にはSNSのアカウントを取得し、絵や動画を投稿したり、インターネット上で友だちとのやりとりを楽しんだりしている生徒もいる。

一方で、本人が特定されるような情報をアップロードしてしまうなど、インターネットの危険性に気付かないまま使っていることも多い。生徒によっては、友だちのアカウントを勝手に使ってサービスを利用したり、友だちに勧められるままに次々とウェブサービスに登録してしまったりすることもあった。また、動画共有サイトにアップロードされた動画の中には、もとの作品の意図を無視して改変されたものや残酷なものもある。「面白さ」という一面だけにとらわれ、これらの動画やそこに書き込まれたコメントを見て、素直に楽しんでしまう生徒もいる。メールにおいても、返信がないと不安になって一方的に送り続けてしまうことや、思ったことをありのままに書いてしまうことなどからトラブルにつながるがあった。

このように、インターネットの魅力的な側面のみにとらわれ、「みんながやっているから」といった安心感から、本人も気付かないうちに無責任な使い方をしてしまっていることが度々ある。技能的にはインターネットを使っても、見えないところにいる人たちのことを考えたり、危険から自分の身を守ったりするにはいくつか課題が見られる。

②授業計画

授業内容を考える際には、Sコースの担当者間で打ち合わせを行い、生徒の情報活用の実態について意見を出し合った。生徒それぞれがどのようにインターネットを使っているのかは、普段の学校生活からは見えにくい。そのため、担当者間で話し合うことで多面的にとらえることができた。生徒の実態から図1に示すように大きく3つのテーマを挙げ、授業を計画した。これらのテーマにそって学習していくことで、責任感と思いやりを持って自分なりにインターネットを活用していく、すなわちセルフマネジメントしていく力を身につけてほしいと考えている。指導計画を表3に示す。

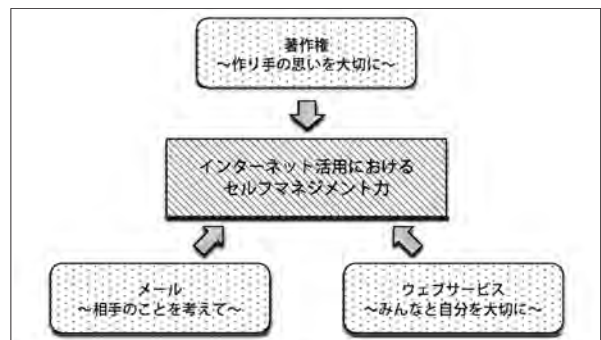


図1 「ネットの達人を目指して」のねらいの構成

表3 「ネットの達人を目指して」の指導計画

| テーマ | ねらい |
|--------------------------------------|--|
| 第1回 著作権 (2時間) ～作り手の思いを大切に～ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 著作権者の思いを大切に必要性が分かる。 ・ 著作権を大切にするための、自分なりの方法を見つける。 |
| 第2回 メール (2時間) ～相手のことを考えて～ | <ul style="list-style-type: none"> ・ メールの特長とデメリットを知る。 ・ 相手のことを考えてメールを送ることの必要性を知る。メールの活用方法を考える。 ・ 自分の個人情報の守り方が分かる。 |
| 第3回 ウェブサービス (2時間) ～みんなと自分を大切に～ | <ul style="list-style-type: none"> ・ ネットの先にある人のことを考えた情報発信の意義を考える。 ・ インターネットを快適に利用するための心得を決める。 |

Sコースの生徒は、「みんながやっていることだから面白い」ととらえてしまいがちで、ネットの世界に潜む危険性などを知らないまま使っていることが多い。そのため、指導に当たっては、自分がインターネットを使っていく主体であること、すなわち、「自分ならどうするか」をじっくり考えられるように留意した。具体的には、生徒にとって身近な事例を取り上げて体験的に学べるようにすることや、話し合いを通して他者の意見も聞きながら考えをまとめられるようにすることなどを中心に教材を考えた。

授業の中の話し合い活動は15名の生徒を3つのグループに分けて行った。また、話し合いの前には、寸劇などを交えて具体的な事例を挙げ、話し合うテーマを明確に伝えるようにした。そうすることで、何について考えればよいか分かりやすく、発言もしやすくなると考えられる。今話している内容や、他の生徒の意見に着目しやすいように、協議した内容はメモ用紙に書き出していくようにした。

③授業展開

(A)著作権～作り手の思いを大切に～

動画共有サイトを利用して生徒たちはさまざまな動画を見て楽しんでいる。その中には、もとの作品の意図を無視したようなパロディ動画なども存在する。そこで、著作権に関する学習では、作り手の思いを考えるとという観点に重きをおいて指導を行った(表4)。

実際の指導では、生徒たち自身が作ったものを著作物の例として扱った。作った時の思いや、勝手に使われた時の気持ちなどをお互いに出し合うことで、自分たちが作ったものを大切に扱ってほしいという気持ちを再認識できるようにした。

教材としては、自分たちの作ったものが他者の作品として紹介されていたり、改悪されて載せられていたりする架空のウェブページを用いた。自分の作ったものが悪意のある使い方をされることに対して、生徒たちが強い抵抗やショックを受けてしまうことも考えられる。そのため、ウェブページを提示する前には、みんなにとってつらいものを見せること、実際にはアップロードされていないこと、書かれている内容は事実ではないことを事前に伝えるように留意した。また、このことは、一見面白おかしく作られたウェブページに対して、真剣に向き合おうとする生徒たちの姿勢を

表4 「著作権～作り手の思いを大切に～」の展開

| 学習活動 | 指導の手立て・生徒の反応 |
|--|---|
| 1. 自分たちとインターネットとの関わりを考える。 | <p>どんなことに使っていますか？面白いのはどこなところですか？</p> <p>今日から3回、インターネットについて学習していきます。</p> <p>動画を観たりしている。天気やニュースを見る。音楽のダウンロードとか、ゲームができる。</p> |
| 2. 「著作権」について知る。 | <p>著作 創ったり、作ったりすること</p> <p>著作物 創ったり、作ったりしたもの</p> <p>著作権とは、書いたり作ったりしたものを、他の人に勝手に使われたりしないようにするための権利です。</p> <p>どうして著作権が必要なのでしょう？</p> |
| 3. 自分たちが「著作」したものを考える。 | <p>夏休みの作品でペン字で作った。まとめ活動で新聞を創った。</p> <p>著作権は、申請しなくても作品を書いたり作ったりするだけで得られます。</p> |
| 4. 自分たちが「著作」したときの思いを発表し合う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 苦しんでいる人が元気になるように曲を作った。 ・ ストーリーアート。細かいところまでのがましくなった。 ・ ペン字で作りは飾り付けのがましくなった。 ・ 新聞は自分たちががんばったこときまどめた。誰か人が分かりやすいように工夫した。 ・ プクッパパー。誰かに使ってもらいたいと思いながら作った。 |
| 5. 自分たちの著作物が勝手に利用されているウェブページを見る。 | <p>架空のウェブページ</p> <p>これから、みんなにとってつらいものを見せます。このような使われたらどのような気持ちになるか、よく考えてみてください。</p> <p>自分たちの作品が、あたかも別人の作品のように紹介されているページ</p> <p>自分たちが作った新聞が改悪されて、誤報中絶されているページ</p> <p>自分たちが作ったドラマが面白おかしく改悪されて公開されているページ</p> |
| 6. このウェブページを見て感じたことを発表し合う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ もやもやして、腹が立つ。 ・ 一生懸命作った物が戻られて許せない。 ・ 文句を言いたくなる。 ・ ネットに遊び半分で作られたら。見たみんなにバカにされて嫌になる。 ・ 見ていられなくて悲しいし、見る気もしない。 ・ 自分のがんばりが人のものになっているような気がする。 |
| 7. ある作品を面白おかしく改悪した動画(実際にネット上にアップされているもの)を見る。 | <p>もとの作品の作者はどう思っているのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ものすごく腹がなっている。 ・ がんばって作った意味があったのかと思ってしまう。 ・ 伝えたいことがまったく違っている。 ・ 面白半分であまりくちやにしているのがひどい。 ・ 自分の思いが壊されている。 ・ 思いを込めて作ったのに残念だ。 ・ 自分がされたら嫌じゃないのかな。 |
| 8. 「著作物を大切にしていこうために自分ができること」をまとめる。 | <p>私はこうする！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 借りた物は返却するようにする。 ・ 人のものは使っていないか聞いてからにする。 ・ 作った人の許可を得る。 ・ 作った人の気持ちを理解する。 ・ 買った本やCDを大切に使う。 ・ 作った人が分からないようにしない。 ・ 本やホームページを見るときには、作った人の目線で見えるようにする。 |

引き出すことにもつながった。

授業の中では、自分が作ったものが悪用されていることに、「ものすごく腹が立って、何だかムカムカします」と憤りの感情を表現する生徒もいた。このような様子から、生徒たちは著作権問題を身近なものとしてとらえることができたと考えられる。

また、動画共有サイトに実際にアップロードされているパロディ作品を見て、意見交換も行った。「もとの作品を作った人は、自分の思いが壊されていると感じるのではないか」などの意見が生徒から出された。もとの作品の作者の立場で考えることで、日頃「面白い」と一面的に感じている物事に対して、異なる視点で見ようとする意識を引き出すことができたと感じられる。

(B)メール～相手のことを考えて～

メールは、基本的には文字という単一チャンネルによるコミュニケーションツールである。また、応答の即時性が低く、やりとりの間にタイムラグが生じる。生徒たちにとって欠かすことができないコミュニケーション手段となっているが、これらの特性から思い違いをしたり、焦りを感じたりしてしまい、互いのトラブルに発展するケースも少なくない。そこで、メールのこれらの特性を知り、うまく活用する方法を見出せるように、学習内容を考えた(表5)。

場合によっては、メールの方が本心を伝えやすいこともある。しかし、この授業においては、文字のみによるコミュニケーションでは見えない側面があるということに焦点を当てて指導を行った。そのため、本心とは異なる内容のメールを送信する場面を例として取り上げ、送った本人の様子とメール内容を比較できるようにした。

また、生徒にとって身近な例として、メールの返信が来ない場面も取り上げた。普段の様子を見ていると、生徒たちは返信がないことにやきもきしていることが多い。しかし、どうして返って来ないのかを第三者の視点から考えることで、「寝ているのでは」「忙しいのかな」など、相手の立場で考えた意見を出すことができていた。

相手に伝わりやすい内容のメールを考える際には、メーラーを模したワークシートを利用した。このことで技術的な負担を除き、文面の内容づくりに着目して取り組むことができていた。

相手の都合を考えたメールの使い方を話し合う場面では、「たくさんメールを送りたい」「遅くまででもメールをしたい」と本心を述べる生徒もいた。しかし、友だちの意見を聞いていく中で、相手が全く同じように思っているわけではないと気づき、自分のメールの仕方を振り返っている様子も見られた。実際にメールをしている間には気付けない、互いのメールに対する考えや不満を知り合う機会とできた。

表5 「メール～相手のことを考えて」の展開

| 学習活動 | 指導の手立て・生徒の反応 |
|---------------------------------------|---|
| 1. 本時の学習を知る。 | |
| 2. 自分たちが普段どのようにメールを使っているか振り返る。 | |
| 3. 「直様の会話」と「メール」について、気持ちの伝わりやすさを比較する。 | <p>対照「メールの内容と本心の気持ち」</p> <p>・直接話した方が、顔が見える。 ・相手がどのような様子で返っているかが分からない。 ・メールだと嘘つきやすい。 ・電話した方がいいのでは?</p> |
| 4. 相手から返信が来ない場合について考え、その理由を話し合う。 | <p>・メールが返ってこないと思いますが、自分の都合だけでなく、相手の都合を考えて送ることが大切です。</p> |
| 5. 相手の都合を考えたメールの方法を話し合い、まとめる。 | <p>相手のことを考えて</p> <p>時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遅い時間でもメールしたいな。 ・相手の都合で時間を考えない。 ・送すぎると相手は寝ているかもしれない。 ・夜の9時ぐらいまでかな。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の愚言はやめてほしい。 ・しつこいのは嫌。 ・内容が分かりやすいメールがいいな。 ・意味のないメールは送ってほしくないな。 |
| 6. 情報不足な内容のメールを見て、感じたことを発表する。 | |
| 7. 確かな情報を載せたメールを作成する。 | <p>連絡メールのポイント</p> |
| 8. 本時の学習を振り返る。 | <ul style="list-style-type: none"> ★ 気持ちをはっきりと伝えたいときは、直接話しよう ★ メールは、相手の都合を考えよう ★ 疑問や不安を、返信しよう |

(C)ウェブサービス～みんなと自分を大切に～

現在、ウェブサービスを利用した暮らしが当たり前のものになってきている。本校の生徒も例外ではなく、普段からそのようなサイトを利用して友だちとやりとりをしている生徒は多い。しかし、ウェブサービスを活用していくためには自分自身で責任を持って、アカウント管理をしていく必要がある。そこで、ウェブサービスを積極的に活用していくという立場で、自分たちがどのようにふるまっていけばよいかを考えることができる授業を設定した(表6)。

Sコースの生徒は、個人情報の管理について以前に学習している。ウェブサービスを利用するに当たっては、多くの場合、アカウントの作成が必要である。アカウントという概念は理解が難しい。そのため、生徒たちが普段から話題に挙げているゲームのサイトなどを例に挙げ、実際の登録画面も提示して、できる限り具体的に伝えるようにした。また、他人に勝手にアカウントを利用される場面を教師が演じ、IDやパスワードを守る必要性とその方法について話し合えるようにした。ここでは、「他の人のパスワードは聞かないほうがよい」など、自分を守るための考えだけではなく、互いを大切にしようとする意見も生徒から出された。

ネット上では相手が見えず、本当の自分も見えずにやりとりができるため、自分本位な行動に陥りやすい。そのことに気付けるように、架空の書き込みを取り上げ、書き込んだ本人と閲覧者のとらえ方の違いについても考える場面を設定した。また、その上で、ネットを見ている人たちのことを意識した書き込みを実践できるようにした。例として挙げた動画に対して、生徒たちは建設的な内容の書き込みをすることができた。このことが、今後SNSなどを利用する際の意識化につながればと考えている。

インターネットを使っていく中での心得をワークシートに記入し、学習のまとめとした。「自分が納得して分かりやすいサイトを選んで使う」「自分がされたらどうかを考える」など、自分が実際にできる心得が多く挙げられていた。

④授業を通して

インターネットという抽象的でイメージがしにくい題材を扱う中で、生徒にとって身近な問題を取り上げたことは効果的であった。中にはパソコンがあまり得意ではなく、授業が始まる前には「難しそう」とつぶやいている生徒もいた。しかし、自分が作った作品や日頃経験する身近な問題などが例として取り上げられると、必死に考えようと学習に向かう姿が見られるようになった。情報機器を用いず、パネルを使って提示したり、ワークシートでメールを作成したりする機会を設けたことも、抵抗感を和らげる要素となった。今回の授業において、生徒たちは実感を持って考え、問

表6 「ウェブサービス～みんなと自分を大切に～」の展開

| 学習活動 | 指導の手立て・生徒の反応 |
|--------------------------------------|--|
| 1. インターネットのできることを挙げる。 | 動画をしたりする。画像をダウンロードする。思ったことをつぶやいたりしている。地図や辞書を使っている。料理のレシピを調べている。買い物をしている。 |
| 2. サービスを利用するには、登録(契約)が必要なものがあることを知る。 | サービスの中には、登録しないと使えないものがあります。登録するときには、自分についての情報を入力します。 |
| 3. 登録するときに気をつけることを話し合う。 | サービスが使えると便利になります。しかし、気をつけなければならないこともあります。 ・情報がどこかに漏れてしまうかも。 ・もしかしたら、お金をとられるかも。 ・架空請求とか詐欺の可能性もある。 ・出会い目的のサイトだったらどうしようか。 ・よく分からないサイトに行ってしまうかも。 ・メールが何重も来るかもしれない。 ・住所を見て、誰かが家に来たらどうしようか。 ・あんまり本気のことを書き過ぎない方がいいのでは。 ・パスワードは簡単なものにした方がいいのかな。 |
| 4. 自分のアカウントを管理する必要性とその方法を考える。 | 「IDが勝手に使われたら…」 ① プレイシミュレーションがほしいなあ…。よし、ネットで買おう！ ② 私は会員じゃないからなあ…。誰か、AさんのIDとパスワードは…。授業に参加している生徒AのIDとパスワードが勝手に使われる…。 ③ Aのもとに商品が届き、代金が請求される。 ④ どうしてAさんのIDとパスワードが分かったのでしょうか？ ⑤ 勝手に使われないようにするにはどうすればいいですか？ |
| 5. インターネットの先にいる人のことを考えてコメントを書き込む。 | 本人たちがよくても、ほかの人が見ると不快に感じる書き込み例。 書く人と見る人では、感じ方が違うことがありますね。 見る人のことを考えて、コメントを書き込んでみましょう。 この男の子は、何回挑戦しても進歩ができません。どのようなコメントを書き込みますか？ |
| 6. インターネットを使う中で、自分ができることをまとめる。 | 自分の身を守るために ・登録するときは、自分にとって必要かを考える。 ・怪しいサイトにアクセスしない。 ・納得できて、分かりやすいサイトを選ぶ。 ・パスワードは見せたり、書いたりしない。 ・簡単なパスワードにしないこと。 ・必ずログアウトする。 ・個人情報やむやみに載せない。 ・必要以上のことをプロフィールに書かない。 ・むやみに登録してお金がかからないようにしたい。 ネットの先にいる人のことを考えて ・他の人の個人情報を言わないようにする。 ・他人を嘲らない。 ・当てのない情報を載せない。 ・相手の気持ちを考えること。 ・自分がされたらどう思うかを考える。 ・勝手に取られてしまうようなことを書き込む。 ・悪意を書かない。 ・上から目線で、命令口調で書き込むのはやめる。 ・恥ずかしいことは載せないように心掛けた。 |

題を自分のものとして受け止めることができていた。学習のまとめでも生徒たちは、自分が現実的にできることを心得として挙げていた。

授業を進める中で、生徒が興味を持てる有意義な教材を用いるように工夫してきた。一方で、架空のウェブページや書き込みなど、不快に感じるような生々しい問題も取り上げた。そのような教材を取り上げるときには、事前にどのような趣旨で取り上げるのかを伝えてから提示するように留意した。話し合いなど和やかに進む場面に対して、このようなじっくり向き合うべき問題を対比的に取り上げたことは、結果として、生徒たちの意欲と真剣さを引き出すことにもつながった。

授業を終えてからも、生徒たちは日常的にインターネットを利用している。今でも、「メールが何通も届く」、「勝手にアカウントを使われた」などのトラブルが起こってはいるが、以前に比べて、そのことを教師に伝えることが増えてきている。このように、生徒と教師の間でトラブルを隠すことなく話し合えるようになってきたことも、今回の授業の一つの成果だといえる。また、今までアニメのキャラクターを描いてネットに投稿していた生徒が、「オリジナルの絵を描いて載せたい」と、著作権を意識した上で積極的に使っていきたいという思いを伝える姿も見られるようになった。

Ⅲ まとめ

特別支援学校に在籍する生徒は障害の特性もあり、物事を単一的な側面にとらえてしまう傾向が強い。そのため周りの状況に流されやすく、「自分ならどうするか」と考えていくためには支援が必要である。

本授業実践では、①寸劇などを用いて場面を具体的に示すこと②生徒自身が身近に経験しうる問題を取り上げること③生徒同士で協議できるようにすることの

3点を指導の軸として取り組んだ。①と②については、問題となる場面を具体的に示したことで、生徒たちが「よくある」「経験がある」とうなずきながら授業に臨む様子が見られた。また、③の取り組みでは、自分では当たり前と思っていたことが、人によって違うと気付くきっかけとなったり、他者の意見をもとに自分の考えを述べられるようになったりと、考えを深めていく上で効果的であった。

今回、生徒たちは授業中に限れば、自分の周囲や、ネットワークでつながる見えないところにいる相手のことを考えながら意見を出すことができていた。しかし、同じ課題を実生活の中で意識し、実践していくことは容易ではない。今後は生徒一人一人に、場面に応じて指導をしていくことが課題として挙げられる。

生徒にとって、今まで知らずにしてしまっていたことと、知っていながらしてしまったこととでは、大きな違いがあると考えられる。例え失敗したとしても、今回学習したことを思い返し、問題点の所在を明らかにして、「自分はどうすればよいかを考える(セルフマネジメントする)」ことができるように継続して指導に当たる必要がある。

引用・参考文献

- 江田裕介(編)(2012), 特別支援教育における情報モラルとコミュニケーションの指導, 情報教育実践研究会.
- 江田裕介(編)(2007), 特別支援学校における情報モラルの教育, 和歌山情報教育研究会.
- 文部科学省(2009)子どもの携帯電話等の利用に関する調査, 文部科学省ホームページ,
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/05/attach/1266542.htm
- 文部科学省(2010)教育の情報化に関する手引き, 文部科学省ホームページ,
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm